

CHOSHI (第9話)

(令和3年7月)

神栖一中・清真中合同チームの総体1回戦の相手のエースは川口と同様に県東選抜に選ばれている選手だった。打順は共に1番。右投げ左打ちまで同じだった。

試合は予想通り、両エースの投げ合いだった。川口は相手打線をよせつけなかったが、5回エラーからピンチがおとずれた。1アウト2塁。ここで追い込んだ川口は三振を狙って、スライダーを投げた。すると真ん中から落ちながら曲がるスライダーをキャッチャーが後ろにそらした。通常は2塁ランナーの進塁は3塁止まりだが、学校の野球場とは違い、正式な球場はファールグラウンドが広い。相手中の監督が大きな声で叫んだ。『回れ。』相手のランナーは一か八か、本塁に突っ込んできた。おそらく川口からヒットは難しいので、勝負をかけてきたのだろう。川口は冷静に本塁カバーをし、キャッチャーからもいいボールが返球されアウトになった。

0-0で最終回7回裏、神栖一中・清真中合同チームの攻撃。2アウトランナー無しで9番の郡になった。押見はふっとある考えが浮かんだ。『同点のままなら、次の回からは特別ルール(ノーアウト1・2塁からの継続打順)になる。郡がアウトになれば、次の回はノーアウト1、2塁で1番の川口から始まる。そうすれば大量点をとれる可能性がある。』押見はこのことを郡に伝えようかと迷っていると、菅宮監督が郡を呼んだ。『お前が出て、この回でゲームを決めろ。絶対、出塁しろよ。』

9番郡はエラーで出塁。そして、1番の川口がライト前にヒットを打ち、郡の好走塁で、1・3塁となった。次のバッターは川口の球を捕っている神栖一中の1年生だった。名将菅宮監督は、打席に行く前にバッターに指示を出していた。『当てにいくな。フルスイングをしろ。』初球、1年生はフルスイングで空振りした。相手中のエースはこのスイングを見て、三振を狙いにいった。2球目。決め球のスライダーが真ん中からきれいに落ちた。

バッターは空振りしたが、切れがよすぎたために、キャッチャーは後ろにそらしてしまった。そして、3塁から郡が生還し、1対0。神栖一中・清真中合同チームはサヨナラ勝ちした。川口はノーヒットノーラン。両投手とも見事なピッチングだった。

2回戦では、シード校相手に守備が乱れ、3対5で負けた。チーム練習がもう少しできたら、シード校ともっといい勝負が出来たかもしれないと思うと残念だった。川口は県東地区から2名しか選ばれない、県選抜に選ばれた。しかし、8月後半からの緊急事態宣言のため、県選抜の関東大会は10月に延期され、8月・9月の選抜の練習会も中止になった。